

2024 年度 西洋中世学会大会 シンポジウム 「薬を語る・薬を知る—西洋中世の薬の歴史と文化—」

趣旨説明

コーディネーター 久木田直江

人類の歴史のなかで病気とともに発見され、現在も生成・創成され続ける薬は、疾病の診断・治療・予防・緩和等の治療型医療に主に用いられてきたが、毒薬、媚薬、ドーピング薬など、広い意味で治療の枠を外れた目的でも使用されてきた。現代では、顧客の願望に応える願望実現医療においても薬が提供され、従来の医療を支えてきた倫理的規範の枠組みに囚われず薬の開発・利用が展開している。このような実態は、薬のありようの本質的な変化を如実に示しているようだ。

医療文化人類学者、バイロン・グッドは、各々の社会は独自の仕方では疾病経験を解釈すると唱えるが、病という経験にいかなる解釈を与えるかは、それぞれの社会や文化と密接に結びつき、そこに多様な言語表現、言説、図像表現が現れる。人間の生・死と複雑に絡み合う薬を語り、薬を知るには、政治・経済・自然科学・宗教・哲学・芸術へと広がる視野が必要であろう。本シンポジウムでは、疾病・健康・生・死などの考え方にキリスト教が大きな影響を与えた西洋中世の医薬の世界を探訪し、その歴史と文化の内実に迫る。

中世末の写本の挿絵には、薬箱が整然と並ぶ薬局のなかで、楽園を追放されたアダムとエヴァが薬剤師キリストとともに描かれることがあるが、このような図の背景には、あらゆる病気の原因を原罪に求める中世の病因論とキリストを霊的な「医師」、「薬剤師」と考える伝統がある。同時に、中世薬学においてはギリシャ医学の体液病理学を軸に、薬効に関する知識が蓄積され、動植物や鉱石など、自然界に存在するものに潜む治癒力が探し求められた。その過程でイスラーム医学・薬学から受けた恩恵は計り知れない。中世後期、各地で都市が発展すると、薬種業が興隆し、薬剤師教育が整備され、薬局方という基準書が現れるなど、西洋近代薬学・薬業の基礎が構築されていく。例えば、薬の処方と調剤を分離する医薬分業が13世紀のフリードリヒ2世によって定められ、以来、西洋での薬業の独立性が維持されてきたのは注目に値する。日本における医薬分業の本格的展開のスタートは1974年とされているが、この一例をとっても、西洋中世の薬の歴史と文化は、社会構造が変化し、人々の価値意識が多様化する今日を生きる私たちに何らかの示唆を与えるかもしれない。

以上を念頭に、本シンポジウムでは総論で医学史・薬学史における西洋中世の特徴を炙り出し、続く報告では異なる学問分野から中世の「薬」を検討する。ま

た、これを踏まえ、東洋医薬学と西洋医薬学の融合という視点でコメントを得る。日本における和漢医薬の研究を牽引してきた富山の地で、文理を横断、東西を越境しつつ、人間と薬のあり方について広く深く考えてみたい。

総論

“Healing body and soul in medieval Europe: medicine, craft techniques and devotion” (西洋中世の心身の治療—薬、技術、信仰—)

Elma Brenner

キリスト教に基づく身体と魂の共生的関係を前提とする中世において、身体
の健康には魂の健康が不可欠であると認識された。同時に、身体が健康であれば
魂の健康に資する信心に専念できると考えられ、修道院では充実した修道生活
を営むため、中世をとおして医薬に関する知識を収集・蓄積し、医療を実践した。
本総論では、フランスやイングランドで制作された写本に加え、アーカイヴ資料
や現存する「物（もの）」を調査・分析しつつ、医学と宗教が共生する枠組みの
なかで実践された治療、即ち、瀉血や食餌の規則から自然界に由来する材料を用
いた薬や護符・まじない・祈りに跨る一連の治療を概観する。特に、近年のマテ
リアル・カルチャーの概念に立脚し、医療の物質的（マテリアル）な側面に着目
しながら、「物」と物作りに用いられる（高度な）技術が心身の健康にいか
に貢献したか問うていく。具体的には、ガラス・陶器・金属・貴石や織物（布地）・
木材などの植物や動物に由来する材料を網羅し、薬壺・蒸留器・外科手術器具・
治療薬・包帯・衣服・寝具・聖具の製作と用途について探り、これらの材料（素
材）や物が臨床現場において、いかに医療の受け手に心の平安と慰めを与え、病
の回復と苦痛の緩和に寄与したか、検討する。さらに、医療における女性の役割
についても考えるとともに、刺繍・木工・写本（書物）製作のような手作業が男
女の区別なく従事者に与えた治療効果にも注目する。この種の行為は従事者を
没頭・没入させる反復作業であり、黙想や観想のように沈思黙考、心身のくつろ
ぎ、精神的安らぎをもたらし、延いては心の健康、心の充足感に影響を与えたこ
とを考えてみたい。

(翻訳 久木田直江)

1. 「西欧医学の礎としてのイスラーム医学」

橋爪烈

本報告は、シンポジウム全体の内容の理解に資するべく、西欧へ導入されることになったイスラーム医学について、特に薬剤に関わる諸側面を取り上げ、その特徴を提示することを主たる目的とする。

まずイスラーム医学が大枠としてガレノス由来の体液説に基づいていることを提示する。併せて、薬学関連の知識もディオスコリデスの著書『薬物誌 (マテリア・メディカ)』を基本としつつ、エジプトやメソポタミア、イラン、インドの薬学や植物、動物、農業に関する知識を集積し、情報の追加、更新を行ったことを示す。また薬物の効能を上記体液説に基づいて理解し、説明していたことを、イブン・スィーナ著『医学典範』の記述を基に提示する。

こうした薬物の情報は「単純薬」に関する章で扱われるが、実際の医療現場ではいくつかの薬剤を調合して生成された「複合薬」が用いられた。複合薬については医学書のみならず、ゲニザ文書中の医学関連の断片やヒスバの書と呼ばれる市場監督の役人の手控え帳の記述からどのような薬剤が存在したかが分かる。またヒスバの書の記述から、模造薬品、薬剤の生成の事例が多くあり、そうした薬剤の生成や販売を行う薬局や香料商の活動を監視し、詐欺や健康被害発生の防止に公権力が関心を持っていたことが分かる。

最後にこうした薬学の知識や薬を扱う制度、慣習がどのようにしてイスラーム圏から西欧世界に伝わっていくか、見取り図を示すこととする。

2. 「中世後期・ルネサンス期イタリアの薬屋」

山辺規子

神聖ローマ皇帝にしてシチリア王のフリードリヒ 2 世は、医療関係の規程を定めた。それによれば、医師と薬屋は密接な関係を持つことを禁じられ、医師は自ら薬屋を経営することはできない。薬屋は医師からの処方箋に基づき、誠実に薬を正確に調合し販売しなければならないなど、薬屋に関する規定も存在する。実際に守られたかどうかはともかく、この規定は、シチリア王国内のナポリのみならず、パルマ、ヴェネツィア、ピサなどイタリア各地の都市にも取り入れられた。中世後期のイタリア都市には多くの薬屋がみられ、アルテ (ギルド) としての活動も知られる。

中世の薬屋は、植物性、動物性、鉱物性など多様な薬剤を調合、準備するため

に、薬学や医学の知識を必要とした。患者に応じて分量を調節し、服用に適したものにするために、分量の正確な計量の知識と技術も必要である。アルテの一員であり、徒弟奉公を通じて技能を習得するとはいえ、「手を使う人」とどまらない。薬剤をはじめ取り扱う品目も仕入れ先も多岐にわたり、必要に応じて自ら栽培、制作に取り組む。顧客には都市貴族もいれば、庶民層もいて、薬屋は人々が集まる場だったという。

この報告では、このように多彩な活動をしていた薬屋について、14世紀半ばのボローニャ近郊のイモラの薬屋の記録、15世紀末のフィレンツェの薬屋の記録を通じて、その具体的な活動を追ってみたい。

3. 「誰のため、何のため？ 中世薬草事典の挿絵について」

池田真弓

「薬草事典の挿絵」と聞いて現代の我々がイメージするのは、実際の種の特徴を的確に捉えた明確かつ写実的な挿絵ではないだろうか。しかしながら、西洋中世における薬草事典（本草書）やそれに類するテキストに付された挿絵は、実際の薬草の姿からは程遠い図式的な絵が描かれるなど、種の特長という用途には供さないものがほとんどである。そもそも、特定のテキストを除けば薬草事典に挿絵を付すこと自体がむしろ例外的であった。その一方で、*Carrara Herbal* (1390-1404年、British Library, Sloane 2020)のように時代を先取りするかのような驚くべき写実性を備えた作品も存在する。このような中世の薬草事典における挿絵の有無や写実性の度合いの違いは、挿絵入りの薬草事典がどのように受容され、利用されてきたのか、ひいては、書物の挿絵にはどのような役割があったのか、という問いを我々に投げかける。

本報告では、上記の問いに答えるべく、冊子の状態で現存している西洋最古の挿絵入り本草書、ディオスコリデス著『薬物誌』（コンスタンティノープル、512年頃、Österreichische Nationalbibliothek, Cod. Med. Gr. 1）を起点とし、挿絵入り本草書最初期の刊本『健康の庭』（1485年、マインツ、ペーター・シェーファー出版）までの千年近い時代の中から、代表的な作品を定点観測的に取り上げ紹介する。各作品の緻密な分析はかなわないが、長い時間軸で薬草事典を概観することで、その使用者や使用方法、挿絵文化の伝統（保守）と革新のパターン、挿絵の持つ意義や役割の変遷を捉えることを目指す。

4. 「中世フランス文学と薬——薬は人を幸せにするのか——」

横山安由美

中世の医学の実践において中心的役割を果たしていた薬は、実際の文学のなかではどのように描かれていたのだろうか。治癒奇跡を中心とする聖人伝ばかりでなく、フランスの世俗の諸作品における描写を観察することで日常における薬使用のイメージを探ってみたい。マリ・ド・フランスの『短詩（レー）』や『狐物語』においては登場人物が自分で薬草を探して薬を作る描写が見られるほか、ロベール・ド・ボロンの『メルラン』では魔術師メルランが薬草を使って王を変身させるといった呪術的使用が描かれる。

ジェンダー的観点から見ると、〈女〉は「癒やし手」という性別役割分担を担わされ、しばしば薬の作り手として登場する一方で、『薔薇物語』のようなミソジニー文学では〈女〉自体が危険な毒蛇に喩えられることがある。

文学において特徴的なのは「恋愛」における薬の使用である。トリスタンの「愛の媚薬」は有名であり、薬は社会的障壁の克服の手段として機能する場合が多いが、その使用が必ずしも幸福な結末をもたらさないことは当時の現実的感覚の表れだろうか。今日では病気は細分化され、局所化されているが、「恋の病」も含め、そもそも病気とは全人格的な問題であり、かつまた当人や家族にとっての社会的な異常事態であるという認識がそこにあったように思われる。